

第13回 北海道小・中・高生短歌コンテスト 【講評】

北海道歌人会代表 内田 弘

今年度も昨年度とほぼ同数の四、八〇五首の応募があった。団体の応募学校数は九十五校あり、特別支援学校三校、学習塾からの応募もあった。第一次審査通過者は三九六名、第二次審査に残ったのは二四五名、入選以上は八十五名だった。入選以上の作品は、優秀であり、応募する皆さんの励みになるにちがいない。

集まった作品は、学校生活での喜び、苦しみをうたったものが多かったが、素直な気持ちで短歌に親しんでくれた結果だと、審査員一同喜んでいいる。作ってみたら面白くて、短歌のリズムの持つ心地よさや楽しさを感じた人も多かったのではないかと思う。

短歌は、飾らずに素直にこころを表現することがとても大切だ。言いたいことをうたうと、実感のこもった歌になり、よい歌になる。そして、言い方の面白さや、言い方の工夫、自分にしか出来ない表現の工夫などにも気をくばると、さらに良い歌になる。自分らしさをうまく表現して、短歌をたくさん作ってもらいたい。

特別賞の四名の皆さんの歌は、独自の見かたや感じかたが、きわ立っていて、素晴らしかった。優秀賞・佳作・入選の作品も、現在の生活が、歌に取り入れられて、個性豊かな作品ばかりだった。全体を通じて言えることは、毎年歌の水準が上がっていることで頼もしい。

ただ、残念な事は今年も盗作(他人の作品を自分の作品と偽って投稿すること)があったことだ。創作と言うのは、あくまでもその人特有のものである。来年度は決して盗作がないように望みたい。

ともあれ、入賞された皆さん！おめでとう！

《北海道教育委員会教育長賞》

夏休み旧手宮線とぼとぼとなつかしさ連れ歩き続ける

北星学園大学附属高等学校 2年 吉泉 智也

【講評】北海道の鉄道として初めて作られた小樽の手宮線。今は線路あとを歩ける散歩道になっている。夏休みに線路あとをたどった。何かなつかしい気持ちになって、いろいろなこと思いながらとぼとぼと歩いたという、情感のあふれる優れた歌である。思えば北海道命名一五〇年でもある。

《北海道立文学館賞》

がんばれたはやねはやおきあさごはんびょうきかからずこんがりひやけ

札幌市立東園小学校 3年 司口 紗菜

【講評】歯切れのよい歌だ。夏休みをまとめると、この歌のようになる。はずむようになりたいぶりに感心する。リズムにのって、たたみこむようにうたったのは、おてがらである。「びょうきかからずこんがりひやけ」が特に生き生きとしていて、優れている。短歌のリズムが生ききている。

《北海道歌人会賞》

夜の道光つて消えて飛んでゆく「夏が終わる。」と告げゆくほたる

札幌市立北光小学校 5年 横沢 匠

【講評】夜の道を歩いていると、ふうつと光つて飛んでゆくものがある。ほたるだ。それを見たしゅんかん「夏が終わる」と感じた。ほたるを個人的にうたったのがよかった。特に「夏が終わる」とほたるが告げる、という表し方がすぐれている。

《北海道新聞社賞》

将来のためよためよと言う大人私の未来をのぞき見ないで

江別市立江別第三中学校 2年 木村かごめ

【講評】思春期の特有のものの感じ方が無理なくうたわれている。自分だけの未来を、大人なんかに干渉されたくはない。大人はいつも口ぐせのように「将来のためよ」と言うけれど、私の未来に勝手にいろいろ言われたくない。気持ちにストレートにうたわれていて、よい歌である。

《優秀賞》

小学一〜三年生の部

春さん歩ジーツジジーツジカエルさん？オオジシギだよくしろしつげん

釧路市立鳥取西小学校 2年 山根 悠聖

【講評】結句の「くしろしつげん」のまとめ方がうまい。釧路湿原に散歩にゆくと、蛙のような声が聞こえて来る。ほかにもいろいろな声が聞こえる。その中で私は、オオジシギの音が特に心にひびく、という歌である。

わらじ虫かれ葉のかげに身をよせておしくらまんじゅう秋の夕ぐれ

苫小牧市立泉野小学校 3年 近藤 芦羽

【講評】いかにも、こんな童話がありそうで、ほのぼのとした歌である。わらじ虫のような小さな虫にまで心をよせる優しさが特によい。葉のかげでからだをよせて「おしくらまんじゅう」しているところもかわいらしい。

小学四～六年生の部

浜益の千本ナラに木もれ日がキラキラ輝きパワーをもらおう

札幌市立平岸高台小学校 6年 森国 怜奈

【講評】「浜益」と「千本ナラ」を出して、生き生きとうたっている。特に大きな「千本ナラ」を見てみると、木もれ日がキラキラと輝いている。その木もれ日に、力をもらったように感じるところが、個性的な感じ方だよ。

誰もいない静まりかえった暗闇でつばさがはえる一人の時間

札幌市立南月寒小学校 6年 高橋 柚亜

【講評】個性的なうたい方がよい。暗闇の中に一人できると、今にも自分につばさが生えて、自由にどこへでも飛んでゆけそうな気分になる。特に、誰もいない静まりかえったひとりの部屋で空想しているところに感心した。

好きだなあ音の波に乗るかんじ私とピアノ十年目の夏

喜茂別町立喜茂別中学校 2年 堀 来羽

【講評】十年間ピアノをやつてきて、いま「音の波に乗るかんじ」がする、と、感じたことを素直にうたったところが良い。最初の句「好きだなあ」に自分の気持ちをこめて、強く言っているのも、なかなか優れたところである。

遠い夏私をおぶった祖母の背も今は小さく優しくまるく

札幌市立向陵中学校 1年 堀田あかり

【講評】おばあちゃんに対する優しい気持ち素直によまれた歌である。私をおぶったおばあちゃんのおい昔の背中を思い出している。いま目の前のおばあちゃんの背は「小さく優しくまるく」なっていました。優しい気持ち表れたのがよい。

冬ざれの西日に向かい命乞い季節逸れたとんぼ地を這う

札幌聖心女子学院高等学校 3年 瀧田 小麦

【講評】とんぼのようすをうまくつかまえてうたった。「冬ざれの西日」がうまい。とんぼの死の場面に対して「命乞い季節逸れたとんぼ地を這う」とうたうのは個性的ばかりではなく、表現として優れている。

真つ黒く焼けたる球児のがむしやらに白のボールを追うは美し

北海道札幌南高等学校 2年 清水 将也

【講評】「美し」とだけでまとめたのがよかった。解説をしないで、美しい、とだけでうたいきったのがよい。「真つ黒く焼けた」野球をやる少年の白いボールを「がむしやらに」「追う」すがたが強く心に残った歌。表現もキビキビしていいよ。

《佳作》

小学一〜三年生の部

さくらんぼかわいいふたごのおちやめさん風にふかれてダンスの練習

岩内町立岩内西小学校 3年 宮川 絢音

【講評】二つつながったサクラランボを「ふたごのおちやめさん」と捉えたところが女の子らしくて良い。下の句も「風にふかれてダンスの練習」に生き生きとした動きが感じられて微笑ましい。

大すきなピアノのねいろひびかせるゆめのぶたいでベートーベンを

札幌市立栄小学校 3年 安藤あかり

【講評】ピアノの発表会なのであろうか。毎日のように練習してきた大好きなピアノの演奏をいよいよ舞台上で披露するのである。結句に具体的な曲名ではなく「ベートーベン」としたところが、この作品の良いところである。

はかそうじきれいになってうれしそうまだ長生きしてほしかったなあ

札幌市立しらかば台小学校 3年 遠山 朋希

【講評】おじいちゃんかおばあちゃんのお墓であろうか、お墓をきれいに掃除し終わったら生前のにやかな顔を思い出したのであろう。下の句で「まだ長生きしてほしかったなあ」に子どもらしい気持ちがよく出ていて感心させられる。

なつのもりひかりかがやく木のすきまくもがつくったハンモックのす

札幌市立藤の沢小学校 3年 陣内 友子

【講評】森の中の木の間に蜘蛛が巣を作り、それが光を受けて輝いていたのであろう。それをハンモックと見たところがこの作品のポイントである。蜘蛛が昼寝をしていると想像したのではなからうか。この目の付けどころが小学生らしいところである。

小学四～六年生の部

平和資料館に原爆で黒く焼けこげたヒヨロヒヨロしてる小さな三輪車

北広島市立緑ヶ丘小学校 6年 三浦 花音

【講評】やや散文的であるが、高学年らしく鋭い観察力である。焼けこげた小さな三輪車から何を連想したのであろうか。その三輪車を見た時の思いを表現するとさらに優れた作品になるであろう。

ひびく音将棋の駒がいくする何手読んでも指すのは一手

札幌市立旭小学校 6年 村山 慈音

【講評】高校生棋士・藤井聡太七段の活躍で小学生にも人気があるという将棋であるが、将棋盤に駒を置く音に注目しているのがこの作品の優れている点である。その音で駒が相手を威嚇いかくするというのも鋭い見方でこの作品を成功させている。

停電でふだんは見れぬ星空を今日はゆっくり二人で見れる

札幌市立発寒東小学校 6年 佃 柊人

【講評】胆振東部地震では全道的なブラックアウトで騒然としたが、この作品のように星空なぐさに慰められた人も多かったのではないだろうか。「今日はゆっくり二人で見れる」の下句がこの作品の優れたところである。

エメラルドすきとおるはねかわかしてブリッジしながらエゾゼミのうか

札幌市立藤の沢小学校 4年 陣内 直子

【講評】この作品も高学年らしく、鋭い観察力から生まれた作品である。エゾゼミの羽化をじつと観察している作者が見えるようである。羽化して出て来た蟬の羽をエメラルドと色で表現したところも素晴らしい。

中学生の部

夏まつり人混みの中歩いてる風にたなびく浴衣のリボン

旭川市立愛宕中学校 2年 遠藤 凜花

【講評】夏まつりの人ごみの中を歩いている浴衣姿の人、そしてその浴衣のリボン結びの帯に注目している。それが風になびく様子をうたい、女性らしい雰囲気を感じる作品にしている。

父の日にちよつと高めのチョコレート喜ぶ父にねだる一口

札幌市立前田北中学校 2年 安宅ひより

【講評】たぶん自分のお小遣いで、父の日にちよつと高めのチョコレートをプレゼントしたのであろう。喜ぶ父に「ねだる一口」がこの作品を生き生きとさせている。自分もふだん食べていないチョコレートだったのであろう。

グラウンドの芝生の匂い熱い風ゆれるカゲロウ突き抜くシュート

苫小牧市立植苗中学校 1年 中川 敏

【講評】「芝生の匂い熱い風」とグラウンドのようすを表現して、サッカーの試合の雰囲気がよく出ている。その熱いグラウンドにゆれるカゲロウを、シュートが突き抜けるというのである。中学生らしくきびきびして好感を持った。

スカートに扇風機のかぜ孕ませて私は空飛ぶ魔法少女

立命館慶祥中学校 3年 新井 花梨

【講評】扇風機の風にあたりながら空飛ぶ少女、それも魔法少女になるという空想の作品である。「扇風機のかぜ孕ませて」は中学生らしい表現で雰囲気のある作品になっている。

教科書の隅に小さく描いている説教中の先生の顔

旭川龍谷高等学校 3年 奥山 結比

【講評】きつとこの情景を思い浮かべる人もいるのではなからうか。授業中に先生の顔を描いた覚えのある生徒はたくさんいる事だろう。説教中の先生の顔を描いているところにこの作品の狙いがあり面白いところである。

君の目はいつも違つて笑つたりさびしそつだつたりうつりげな空

北海道高等聾学校 3年 田村 実咲

【講評】気になる君の表情を何時も観察しているのである。特に目を見ることによつて、その時の感情を知ることが出来る。その君の表情に一喜一憂している作者なのである。 「うつりげな空」に作者の君に対する思いが感じられる。

画面には「笑」とあるが実際はスマホをにらみニコリともせず

北海道札幌白石高等学校 1年 深井 颯

【講評】スマホの絵文字は色々な表情を表現するが、必ずしも見る者の気持ちに添うわけではない。「笑」とあつても笑えるわけではない。そうした複雑な感情をうたつているところにこの作品の特徴がある。

肩濡らし走つて帰る君を見て容易く触れてる雨を羨む

北海道津別高等学校 3年 田口 雅斗

【講評】愛おしく思っている君は、雨の中を走つて帰つて行つてしまった。その君の肩を濡らす雨を羨ましく思うという、初々しい恋の歌「容易く触れてる」がこの作品を優れたものにしてている。

《入選》

小学一～三年生の部

ながればし空からおちてきれいなひねがいかなえておやすみなさい

岩内町立岩内西小学校 3年 阿部幸綺菜

【講評】流れ星に願いを託すのは古くからの慣わしであるが、「ねがいかなえておやすみなさい」と子どもらしい表現で好感が持てる。

夏の夜空きらきら光る天の川あつてみたいなおりひめさまに

岩内町立岩内西小学校 3年 杉本 李心

【講評】夏の空に光る天の川から織姫を連想しているが、「あつてみたいなおりひめさまに」が女の子らしくて良い。

まんまるの小さなたいよう。パコーンときもちスツキリうれしいテニス

札幌市立厚別北小学校 3年 矢谷いぶき

【講評】テニスのボールを「小さなたいよう」と表現しているところが面白い。そのボールを思いつきり打った音「パコーン」もこの作品を生き生きしたものになっている。

オクラはね切ったら星が出てくるのすてきな夜のおいしいごはん

札幌市立立東生館小学校 3年 黒住菜々子

【講評】オクラの切り口が星の形をしているという発見がこの一首の見どころである。「オクラはね」が子どもらしい表現で「すてきな夜のおいしいごはん」も微笑ましい。

きゅうしよくはいつもおいしく食べあきないみそラーメンはしあわせになる

札幌市立東園小学校 3年 荒川 侑真

【講評】小学生に人気の給食の献立である「みそラーメン」を詠んで「いつもおいしく食べあきない」と素直に表現しているところが良い。

なつやすみマリナーパークでさかなみたキレイだったよイルカのおよぎ

札幌市立東園小学校 3年 石戸谷奏来

【講評】登別のマリナーパークであろうか。「キレイだったよイルカのおよぎ」とイルカの泳ぎに注目し素直に気持ちを表現しているところが子どもらしくて良い。

山登りけしきはきれいな足はいたい町は小さく空はひろいよ

札幌市立東園小学校 3年 柴山 朋花

【講評】山登りをした時の様子を表現しているが、見たことを順に並べているところがやや残念である。これでも短歌にはなるが、作者自身が特に感動したところがわかるとさらに良い作品になったであろう。

神様にわたしも空をとびたいとかなわぬねがいついしてしまふ

札幌市立発寒西小学校 3年 天間あかり

【講評】空を飛んでみたいという願望は、多くの子どもが持っている。たしかに「かなわぬねがい」ではあるが、空を飛んで何をしたいのか何を見たいのか具体的な事柄を入れるともっと良い作品になるであろう。

マウンドでグローブかまえてじゅんぴするボールをおつて走りに走る

札幌市立伏見小学校 3年 小仲 陸王

【講評】野球をしている時の作品はよく見るが、この作品は上の句から考ええるとピッチャーなのであろう。ピッチャー返しのボールが飛んできたのか、下の句と上の句のつながりを工夫するとさらに良かったと思う。

あかいろの高くそびえるテレビとうアイスにかわれとねがう夏の日

札幌市立山鼻小学校 3年 矢花 優

【講評】テレビ塔がアイスに変われと言う壮大な表現が面白い。それほど暑い日だったのであろうが、その背景が分かるともっと良かったと思う。

夜の空流れ星たちおにじじいまでおいでつかまえてごらん

札幌市立米里小学校 3年 佐藤こはく

【講評】夜空に流れる星が、鬼ごっこをしていると捉えたところがこの作品の面白いところである。自分も鬼ごっこの仲間入りを
して「いこまでおいでつかまえてごらん」と子どもらしい表現で好感を持った。

ハロウィンがちがづいてくるもうすぐだおばけになっておかしください

東川町立東川第二小学校 3年 澤田 琉星

【講評】今年もハロウィンが盛んだったが、お化けに仮装して家々を回りお菓子をもらうとのこと、下の句の「おばけになってお
かしください」は端的な表現で良い。

バーンバン花火の音に耳ふさぐ空見上げると一面の花

北海道教育大学附属札幌小学校 3年 板垣 宝純

【講評】花火の音は近くにいると地面に響くほど激しいが、その音に耳をふさぎながらも夜空を見上げると「一面の花」と表
現し感動が伝わってくる。

わあーきれいとよひらがわでみたはなびはなばたけにさくかわいいおはな

北海道教育大学附属札幌小学校 3年 高倉小桃愛

【講評】豊平川の花火大会の作品であるが、「わあーきれい」と一句目に感動を表し、下の句に「はなばたけにさくかわいいお
はな」と子どもらしい表現で微笑ましい。

もいわやまたくさんすべり足いたいそれでもすべるじょうきゅうコース

北海道教育大学附属札幌小学校 3年 堀 貫太郎

【講評】小学生にもスキー検定があるのであろう。上級コースを検定試験で合格すべく懸命に練習している様子が良く表現さ
れている。

夜の海月で照らされ海光る星もかがやく君もかがやく

旭川市立旭川小学校 5年 中川 礼音

【講評】夜の海の暗さを言うのではなく、暗いからこそ光るもの、輝くものを見つけた。星と君が同じくらい輝いていると感じたところ、「かがやく」を繰り返したところに詩情があった。

木の中にエゾフクロウがひよこりと藻岩の山はいつでも見てる

札幌市立幌西小学校 5年 山本 果凜

【講評】自分自身は山に行つたとき、偶然にしか見られないだろうエゾフクロウだが、藻岩山はいつも見ている。自然に親しむところが感じられ、また、藻岩山の擬人化がうまかった。

動物園夜に行つても元氣な子遊んでばかりのレッサーパンダ

札幌市立栄南小学校 6年 鈴木 音寧

【講評】夜は眠るもの、という常識をくつがえされた驚きが素直な表現でうたわれている。レッサーパンダが元氣に遊ぶ姿を見ることができた楽しさもよく伝わってくる歌で読む側も楽しくなる一首。

今夜だけ夜空は野原に変えられて数えきれない花さきほこる

札幌市立札幌北小学校 6年 佐藤 椿

【講評】花火を夜に咲く花にたとえるだけでなく、夜空を「野原」としたところがとてもよかった。「今夜だけ」という表現に実感があり、「数えきれない花」から花火の様子が目に浮かぶようだ。

帰り道気づけばいつも一人きり私はわざと彼の背を追う

札幌市立発寒東小学校 6年 浅川あんな

【講評】追い越すのでも、追いついて話しかけるのでもなく、「背を追う」という距離感が二人の微妙な関係をうまく表現でき
ており、また、「わざと」というところに個性を出せている。

水平線立てればくずれる砂の城夕焼け光る夏終わりかな

札幌市立発寒東小学校 6年 森田 紗夜

【講評】「水平線」「くずれる砂の城」「夕焼け」というさみしげな詩情のある言葉選びとそのたたみかけが巧み。夏の終わ
りの海辺の夕景が読者の頭にあざやかに浮かぶ一首だった。

淡路島あかし大橋長かつたゲルゲルめぐるうず潮とぼく

札幌市立平岡南小学校 6年 萩原 陸太

【講評】実景を切り取り、素直に写し取ったところに好感が持てる一首。鳴門なるとのうず潮を見て自分もめぐるると渦巻いている
ように感じたのだろう。大きな景色をダイナミックにうたっている。

たんぽぽがいろんな場所に芽を出して地面を全部黄色にそめた

札幌市立北陽小学校 6年 堀井 柚稀

【講評】「地面を全部」染めるほどの数と勢いへの驚きが率直に表現されている。春にいつせいに咲いたんぽぽの生命力と、「咲
いた」と言わずに、咲いたことを言い表したところがよかった。

帰りみちふと空見ると赤い星祖母に教えた近づく火星

札幌市立円山小学校 4年 矢野 七雨

【講評】夕暮れ時、祖母が作者を迎えに来てくれた場面だろうか。祖母から教わるのではなく、自分が火星のことを教えてあ
げているという、喜びが伝わってくるほのほのとした歌。

砂の白新緑の松混じり合い日本の誇り天橋立

札幌市立円山小学校 5年 磐上 天志

【講評】色の対比が美しい旅行の歌。雄大な北海道の自然とはまた違った絵画的な美しさに感動した経験を色あざやかに描いている。ただの緑ではなく新緑としたところが特によかった。

るりいろがくものすきまにチラリとね今日のシアワセみつけちやったよ

札幌市立山の手南小学校 5年 中島 樹

【講評】雲のすき間にわずかに見えた瑠璃色は、いつも空を観察してないと気付かないものだろう。毎日探していると思われる小さな「シアワセ」。これからも探しつづけてほしい。

京極のようてい山の水の音身も心にも静けさ伝わる

札幌市立山の手南小学校 5年 西山 充

【講評】水の流れる小さな音が聞こえることで、かえって静けさを感じるといふ古来からの日本らしい感覚を持った作者。その静けさが身だけでなく心にも伝わってくるという繊細さがよかった。

たのしみは真夏の昼に自転車のペダルをふんで風になるとき

苫小牧市立若草小学校 6年 今井 愛斗

【講評】「真夏の昼は暑いものだけれども、自転車に乗っているときはさわやかな風になったような気分で暑さも文字通り吹き飛ばす。「ペダルをふんで」という表現に工夫を感じた。

函館に向かうフェリーから見た海は光をのんだ青いガラスだ

函館市立万年橋小学校 4年 笹岡 綾奈

【講評】海の表現が巧み。「青いガラス」だけでもその感動がわかるが、「光をのん」でいるというところに個性があり、実際に見て思ったことをうたっているから、読者にも感動が強く伝わる。

さよならは悲しい言葉じゃないんだよ「次」が始まる大切な言葉

厚真町立厚南中学校 2年 池田 葵

【講評】別れのあとには出会いが待っている、という希望を強く信じる心を自分の言葉で素直にうたっている。どんなときも「次」があるということを忘れずに心にもち続けてほしい。

雨の日の雨粒の音が聞きたくて傘をさして外に出てみる

小樽市立善園中学校 2年 石川 美咲

【講評】雨音をより近くで聞きたくて、雨の中あえて外に出る作者。天気の中でも嫌われがちな雨だが、それを楽しむ方法を知っていて、雨が好きだという気持ちがよく伝わってくる。

朝焼けの海に魅せられ息をのむ紅き空には白鳥わたる

北広島市立大曲中学校 2年 本條 光起

【講評】朝焼けの海の広く美しい光景が目には浮かぶような一首。「息をのむ」という表現に感動が強くあらわされている。また、白鳥を詠みこんだことで風景にアクセントができた。

友達と親にないしよで抜け出したあの日がうつる夜桜並木

札幌市立前田北中学校 2年 國弘 実風

【講評】門限をすぎてから、友達と夜桜並木を見に行き、一緒に撮った写真。先々まで大事な思い出となるだろう。漢字とひらがなのバランスがよく、見た目にも心地よい歌だった。

あじさいがさしこむひかりで輝いた気持ちも晴れる雨あがりの朝

伊達市立光陵中学校 2年 富田 一葉

【講評】空が晴れた時に気持ちも晴れた、という言葉遊びが楽しい。雨あがりのあじさいのようすがリアルに描かれている。また、それが「朝」であったことも気持ちとよく合っている。

亡き祖母のメールの下書き母に向け、ありがとうの字笑みがこぼれた

千歳市立千歳中学校 2年 会川 瑞希

【講評】亡くなったお祖母さまの持ち物だった携帯電話がスマートフォンに、下書きのまま送られなかったメールを見つけたのだろう。作者の優しい気持ち伝わり、また現代的でもある一首。

「好き」だって勇気を出して伝えても気持ちは届かぬ液晶画面

千歳市立千歳中学校 2年 谷 涼帆

【講評】スマートフォンなどは、言葉を伝えることはできるが、気持ちまでは届けられない、と感じたのだろう。便利さと引き換えに言葉と気持ちの間にズレが生じることに気づいた点がよかった。

公園のさびたブランコにこしかけて車通らぬ道路を見つめた

苫小牧市立青翔中学校 2年 内藤 岳玖

【講評】「さびたブランコ」「車通らぬ道路」という具体的で寂しさを感じさせる言葉の使い方がうまい。全体的にさびれた街の雰囲気伝わってきて、作者の寂しさを象徴しているようだ。

はちまきを頭に巻いて船に乗りこんぶの香りも風の船に乗る

根室市立歯舞中学校 2年 小田 恵矢

【講評】威勢がよく勢いもあって、地域に根差した歌。郷土愛を感じる。こんぶ漁をする人は「船」に、こんぶの香りは「風の船」に乗る、という機知にとんだ表現もとてもよかった。

ふるさとの歴史がかおる桜の木城下の町の訛りなつかし

松前町立松前中学校 2年 福野 海

【講評】石川啄木の短歌を下敷きにした歌。ふるさとの訛りを懐かしむ気持ちは、時代も地域も超えることを感じさせる。「歴史がかおる」「城下の町」という言葉が地元を巧く表現している。

夕暮れに手繋ぐ親子懐かしく手を繋ごうよと母に頼んで

立命館慶祥中学校 1年 山口まりん

【講評】夕暮れという時間設定が、懐かしむ気持ち強くさせているように感じる。「頼んで」という表現に少しの照れが見えるようで、中学一年のいましか詠めない歌だと思った。

帰り道内に秘めてる恋心歩幅合わせるあなたに気づく

立命館慶祥中学校 1年 横田 心暖

【講評】自分は恋心を秘めているが、「あなた」は歩幅を合わせることで恋心が外にあふれてしまっている。「あなた」のおもいに気づいてしまった作者のこれからを空想させる力のある一首。

暗黒の太古の海より泳ぎ出で現在をもくらうモササウルス

立命館慶祥中学校 1年 奥山 航輔

【講評】北海道でも化石が出土した恐竜。昔の獰猛な姿を想像したうえで、現在も人々の想像を喚起してやまない未知な部分があることを、「現在をもくらう」と表現したところが印象深い。

八月の都の夜を赤く染め先祖をつなぐ五山の送り火

立命館慶祥中学校 3年 遠藤志穂子

【講評】火が文字を浮かび上がらせるという幻想的な光景と、送り出す先祖たちのつながりや、今を生きている自分たちとのつながりまで思わせる、非常にスケールの大きな世界観がよかった。

ジェット機の音轟くやひまわりの海が波打つ青空の下

旭川龍谷高等学校 1年 奥野 正曜

【講評】晴天の日、ジェット機を見上げているのだろうか。その轟音と、ひまわりが波打つという触感や風圧がリアルに感じられて、感覚に訴えてくる臨場感がよく表現されている。

叶わぬと言われてもなお願い込め短冊に筆走らせている

旭川龍谷高等学校 1年 新屋 若菜

【講評】具体的な願いをあえて書かないことでその内容を読者に想像させている。願いが叶わないと言われたことに反発する心が「走らせ」という言葉によく出ており、勢いを感じる。

風りんがちりんと鳴った縁側に半そでセーラーりと輝く

帯広北高等学校 2年 尾野 里緒

【講評】「りん」が三回繰り返され、それぞれに意味を持つ楽しい歌。アイロンがきちんとかけられているだろう夏のセーラー服に清潔感が感じられ、また、縁側という舞台設定がよかった。

なつかしの故郷の風景想い出し母の手作り気持ちで味わう

帯広北高等学校 2年 小出 頼人

【講評】現在は一人暮らしで故郷を離れているのだろうか。そこに、実家の母から故郷を思わせる食べ物が届き、味だけでなく故郷の雰囲気も運んでくれたのではないか。五感に訴えてくる歌。

初めてのオープンキャンパスバスの中友と二人で夢語る夏

帯広北高等学校 2年 平山 紗妃

【講評】行き、帰り、どちらにもとれるが、おそらく帰りのバスだろう。夢のある未来をオープンキャンパスで垣間見たよるこびが伝わってくる。高校生の今しかうたえない、価値ある青春の歌。

少しずつ歩くりズムの変わりゆく君と未来を眺めるうちに

帯広北高等学校 3年 猿倉 準也

【講評】歩くりズムは自分のペースでつかむものだけでも、「君」と出会って、互いにペースを合わせていこうとする姿勢を感じた。リズムという明るい言葉に楽しい未来を予感させる。

人間が大地をよごし空をよごし地球をよごし天気がこわれた

北海道旭川工業高等学校 2年 久須美達弥

【講評】大きな世界を汚す小さな人間が描かれる。大地・空・地球とだんだん視野が広がり、汚していった結果、天災にさいなまれることになる人間の小ささを感じさせるといふ巧妙な一首。

夏の夜輝く君に照れ隠し慣れない下駄に慣れない浴衣

北海道小樽未来創造高等学校 1年 柿村 彩寧

【講評】「輝く」というのは「君」が花火や夜店の灯に照らされますます眩しく見えているということだろう。その君に対して、背伸びしている自分が「慣れない」に表れていて微笑ましい。

染まりたいあなただけの黄色へと太陽に向かいのびるひまわり

北海道小樽未来創造高等学校 1年 本間 桃奈

【講評】ひまわりの気持ちやすく取って代弁しているだけでなく、そんなひまわりに自分の心を託しているのだろう。一途なひまわりのようになりたいという気持ちのあらわれた一首。

朝風の中に弾けたきのこ雲あつてはならぬ戦争の二文字

北海道小樽未来創造高等学校 3年 角田 健太

【講評】原爆という過去の戦争の終結をうたいながら、「二文字」とまとめたことで、太平洋戦争だけでなくこれから起こるかもしれない全ての戦争への警鐘も含めた、普遍的な歌になっている。

僕たちはわからないまま生きているこれからなにが去りあらわれる

北海道高等学校 3年 青野 圭吾

【講評】具体的な表現はないけれども、とても伝わってくる、共感を呼ぶ一首。何かが去って終わるのではなく、最後にあらわれることで未来につながる感じがよく出ているところがいい。

あの人の言葉ひとつでさわがしく一喜一憂している心

北海道札幌白石高等学校 1年 谷岡 愛海

【講評】言いたいことがきちんと伝わるストレートで素直な歌。「ひとつ」「一喜一憂」と、「一」を繰り返したことで複雑さを排した純粹で率直な思いが感じられる一首となった。

春なのにつめたい風がひらひらとスカートゆらす新しい日々

北海道札幌白石高等学校 1年 平田 絢乃

【講評】上の句の、やや後ろ向きなことにばに対して、新しい日々が始まった、という前向きな下の句に意外性があつていい。もしかしたら、スカートも新しい制服なのかもしれない。

寂れてゆく故郷をこの目に焼きつけて旅立ちの日に近づく時間

北海道滝上高等学校 3年 立花 優輝

【講評】寂れてゆく故郷と旅立つ自分に「時間」という共通点を見ている。故郷を離れる感傷、愛着とともに、新天地での未来に対する希望という、対照的な感情がうまく収まっている。